

就学移行支援に向けて保育所・幼稚園で実施する発達評価の試み —5歳児の発達スクリーニング試案—

堀江 真由美 玉井ふみ

県立広島大学保健福祉学部コミュニケーション障害学科

2011年 9月7日受付

2011年 12月8日受理

抄 録

就学移行支援のために、園で保育者が実施して支援の必要な5歳児を検出できるスクリーニング項目を検討した。言語・コミュニケーションの視点から説明課題、音韻意識課題の評価も加え、2つの問診票項目、4つの実施課題を57名の年中児に実施した。発達障害が疑われる子どもや経験不足で能力を発揮できていない子どもを園の中で育てていく視点で設けた不通過基準案では、発達問診票項目では7.0%、行動問診票項目では19.3%、説明課題では17.5%、音韻意識課題では15.8%、片足支持課題では7.0%、行動制御課題では24.6%を検出した。支援体制について2つの基準案を設け、片足支持課題、行動制御課題を除く4つの問診票項目・課題のうち、いずれか1つの問診票項目・課題で不通過になった14%を園の中でフォローすることが望ましい子とし、2つ以上の問診票項目・課題で不通過になった8.8%を他機関と連携することが必要な子とした。

キーワード：5歳児発達スクリーニング、言語課題、発達障害、就学移行支援、支援体制

1. はじめに

就学移行支援のために、各地で5歳児健診が行われ始め、発達障害への支援を求め受診・相談を希望する就学前の幼児が増加している。現在、就学前の言語・コミュニケーション評価や支援は療育センターなどの専門機関で行われている¹⁾。しかし、発達障害児を診断・支援する専門機関は現在どこも、受診までに数か月待機を要する状態である²⁾。個別評価、個別支援を提供するにはマンパワーの限界がある。就学前の発達障害児への新たな支援方法を検討することは急務の課題となっている。

日中の多くの時間を子どもと接している保育者に求められる役割はますます大きくなっている。保育者は保護者から子育てや子どもの発達、集団適応等に関する様々な相談や支援を求められ、対応に苦慮している。子どもに日常的に関わる保育者が評価する視点を持ち、保育の中でできる支援方法を考えていくことが現在の課題でありニーズである。

2. 目的

今回の研究では、就学前の年中児に対し保育者が園内で実施でき、支援の必要な子どもを共通認識し、支援する課題を整理できるスクリーニング問診票項目や実施課題を検討する。また、今回実施した問診票項目の通過率や実施課題の正答率から各課題の不通過基準を提案し、他機関と連携するなど、就学に向けて支援が必要な子どもをスクリーニングする基準を提案することを目的とする。

第1の目的として、就学までの1年間に保育の中で支援を行うため、支援の必要な年中児を検出できるスクリーニング問診票項目を検討する。

支援を有効にするには、支援の必要な子どもについて、園全体で共通認識を持ち関わっていくことである。しかし、保育士が支援の必要性を感じる「気になる」子の捉え方が保育士間でも異なる³⁾という意見もある。そこで、保育士間の共通認識が図れる具体的な評価項目を作成することにした。

また専門家による評価ではなく、日々関わっている保育士が保育の中で、発達や行動面について評価するために、保育士にとって評価しやすい問診票項目を作成する。

第2の目的として、これまでの健診では、園で実施されるものは問診票への記入がほとんどであったが、就学前の健診等では項目として少ない言語・コミュニケーションの視点からの評価も加え、今後は園の中で支援に結び付けていくために、園で実施でき、細かな子どもの実態が分かる課題を検討する。

保育の中での言語・コミュニケーションの評価およ

び支援方法に関して実践されている研究は少なく、保育指針に基づく保育計画でも、年長児の言語領域については「言葉遊び」を取り入れる等の実践が行われているが、評価という視点にはたっていない⁴⁾。また園で課題を実施することは、感情や状況を整理して言語化してくれる保育者がいる生活の場であり、子ども達にとって本来の姿が出る場となる。言語面に関して支援に結びつく評価を園内で行うことは効果的であると考える。

小枝^{5, 6)}は5歳児健診で行動に問題を有した子に比べ学習障害等の言語・コミュニケーション面に問題を有する子どもを判別することは難しいとしている。しかし、言語・コミュニケーション面の問題があると就学後すぐに本人自身は困り感を持つため、就学前からの言語・コミュニケーション面の評価を考えていくことにする。

今回は言語面の評価として説明課題、音韻意識課題を行い、通過率の高い課題をスクリーニング課題として選定する。

説明課題は質問に対して応答する課題とし、理解力、表出力を評価できる課題であり、語彙理解力、聴覚的理解力、統語能力等の言語能力を必要とする課題であるため、言語面のスクリーニングを行うには効率的で適していると考える。また、質問内容は日常生活の中の出来事に関する質問を中心にした課題を作成する。

音韻意識課題は、就学前の読み書きの準備性を見るものである。読み書きは就学後から一斉教育にて学んでいくもので就学前にできる必要はないが、準備が整っていることが就学後の読み書き学習をスムーズに受け入れられることに繋がる⁷⁾。就学前の時期は話しことばから書きことばへ移行する準備の時期である。円滑に書きことばへ移行する準備状況は、音韻意識との関係が深いとされている⁷⁾。言語・コミュニケーション面について就学前から準備性の視点を持った課題を取り入れる。

第3の目的として、支援の必要な子どもを客観的にスクリーニングする評価基準案を作成する。

三原市が平成21年に公立保育所の保育士にアンケートを実施した結果⁸⁾、公立保育所の年中児215人中、保育士が「気になる」子は38.1%の82人であった。就学後の普通学級に6.3%の発達障害児が在籍しているという文部科学省の調査と比べると、平成21年の調査では幼児の年中時期に保育士の気になる子の数が多い傾向がみられた。しかし対象が年中児であり発達途中のためにできないことも多く、保育士が気になる人数が多くなっていることも考えられる。支援を必要とする年中児を客観的にスクリーニングできる評価基準が求められる。これは就学までの1年間に園内で支援していく子どもをスクリーニングするために、5歳0か月に達している子どもをスクリーニングでき

る基準にしたい。

また、スクリーニング評価基準案で不通過となる子と、保育士が「気になる」子の関係を知ることで、保育士の子どもを見る視点についても検証したい。

また今後の支援体制を考えていく上で、園内で保育士が共通認識を持ち支援していく必要がある子、相談機関・療育機関と連携する必要がある子を判断する基準案も提案する。

3. 方法

3.1 対象

M市内の2か所の保育所に在園する年中児（4歳10か月～5歳10か月）、計57人（男32人、女25人）。実施期間が10月～2月であり、5歳未満も5人含まれていた。

3.2 保育士の気になる子の実態について

保育士の気になる子の実態を調査するため、担任保育士に「気になる子」「気にならない子」に分けてもらった。さらに保育士の「気になる子」を、質問紙を用いて、3段階の「とても気になる」「少し気になる」「様子をみたい」に分けてもらった。「とても気になる」はいつも強く気になる、「少し気になる」はときどき気になる、「様子をみたい」はたまに少し気になるという注釈をもとに判断してもらった。

3.3 評価者および内容

評価者は年中児担任保育士5名であり、保育経験年数20年以上2名、5年以上3名である。5年以上3名については園長と話し合いながら実施した。

年中児担任保育士が2つの問診票項目（発達問診票、行動問診票）と4つの実施課題（説明課題、音韻意識課題、片足支持課題、行動制御課題）を用いて評価を行った。

3.3.1 問診票項目について

発達問診票項目については、平成19年度鳥取県乳幼児健康マニュアル⁹⁾を参考に、小枝^{5,6)}が実施した5歳児健診の発達問診票12項目のうち、年中児の約90%が「できる」とする11項目を用いた。残りの1項目の「家の人に伝えてから外に出かける」は通過率が74%であり、また保育士への設問項目として適切ではないため削除した。言語課題を増やすために、鳥取県⁹⁾実施し診察場面で用いている「しりとり遊びができる」を項目として加え、計12項目を設定した。

行動問診票項目は、福知山市など先進地域の5歳児モデル健診事業¹⁰⁾を参考に、行動に問題のある子がもつ特徴をあげた15項目、広汎性発達障害に関

係した3項目を用いた。また3歳児健診との比較を行うために、M市の3歳児健診で使用している行動面に関する2項目を取り入れて計20項目を実施した。

3.3.2 実施課題について

説明課題は、既存の検査である質問-応答関係検査、新版K式発達検査、田中ビネー知能発達検査の質問の仕方を参考に10問作成し実施した。

音韻意識課題は文字学習の準備状況が分かる音韻抽出課題であり、原¹¹⁾を参考に実施した。絵図版と単語の音韻数を○で描いた紙を子どもに提示し、子どもが○を1つずつ指しながら音韻に区切って発声して音韻分解を行った後、語頭音に当たる○を指さしながら、「ここは何の音？」と尋ね音韻抽出課題を実施する。3モーラの単語を3単語用いて語頭音、語中音、語尾音の順番を変えて提示し、音韻をたずねた。

片足支持課題は身体の平衡感覚を検査する課題であり、JMAP（日本版ミラー幼児発達スクリーニング検査）を参考に、片足立ちを両足について実施し、左右ともに7秒間できるかどうかを実施した。

行動制御課題は、鳥取県⁹⁾の5歳児健診の診察場面で実施している項目を参考に、椅子に座って、目を閉じて体を動かさない状態を20秒間続ける課題を実施した。この課題では自己刺激行動が目立つ場合には、行動統制力が弱いと判断できる。

3.4 スクリーニング結果を就学移行支援に反映させるために

2つの問診票項目（発達問診票、行動問診票）と4つの実施課題（説明課題、音韻意識課題、片足支持課題、行動制御課題）に、先行研究や通過率・正答率を参考に不通過基準案を作成する。それを就学移行のための支援に反映させる基準案を作成する。

4. 結果

4.1 保育士の「気になる子」について

保育士が「気になる子」としたのは、57人中29人（50.9%）と高い率を示した。

保育士が「気になる」とした子の中で、「とても気になる」が10人で17.5%、「少し気になる」が17人で29.8%、「様子をみたい」が2人で3.5%であった。

4.2 発達問診票について

今回実施した園での発達問診の通過率は、全12項目について31.6%～91.3%となった。30%台は「ブランコがこげる」項目であり、60%台は「自分の左右がわかる」項目であった（表1）。今回の問診票と同じ11項目を鳥取県⁹⁾の5歳児健診で実施した結果は88.3%～99.4%の通過率であり、11項目中9項目

表 1 発達問診項目の通過率

	今回の発達問診通過率 (N=57)	小枝らの通過率(平均 5 歳 6 か月) (N=498)
スキップができる	80.7%	89.6%
ブランコがこげる	31.6%	92.4%
片足でケンケンができる	93.0%	98.2%
お手本を見て四角がかける	71.9%	96.7%
大便が一人でできる	86.0%	97.8%
ボタンのかけはずしができる	91.3%	99.4%
集団で遊べる	73.7%	98.4%
ジャンケンの勝敗がわかる	77.2%	98.4%
自分の名前が読める	80.7%	93.6%
発音がはっきりしている	71.9%	92.0%
自分の左右がわかる	61.4%	88.3%
しりとり遊びができる	(独自の項目) 71.9%	—

表 2 発達問診項目の「できる」の数と保育士の「気になる」との関係

	「できる」と回答した項目数	7 項目以下	8 項目以下
気になる	とても気になる	3 人	4 人
	少し気になる	1 人	3 人
	様子をみたい	0 人	0 人
気にならない	気にならない	0 人	1 人
計		4 人 (7.0%)	8 人 (14.0%)

表 3 行動問診項目の「よくある」割合

	行動問診 「よくある」割合 (N=57)	「よくある」の回答の 中で、「とても気になる子」が占める割合
課題に集中して取り組めない	10.5%	66.7%
外からの刺激に気が散りやすい	22.8%	53.8%
指示通りに行動できない	5.3%	66.7%
座っているべきところで席を離れる	14.0%	62.5%
落ち着きがない	19.3%	45.5%
順番を待つことが難しい	3.5%	100.0%
手足をそわそわ動かす	10.5%	33.3%
自分からけんかになりやすい	12.3%	57.1%
かんしゃくをおこしやすい	7.0%	75.0%
ルールに従って遊ぶことが苦手	8.8%	80.0%
注意してもきかない	7.0%	50.0%
好きなことしかしない	3.5%	50.0%
友だちとうまく遊べない、一人遊びが多い	12.3%	71.4%
こだわりが強い	14.0%	87.5%
不器用である	21.1%	41.7%
急に予定が変わると混乱する	7.0%	50.0%
一方的に自分の話したいことだけを話す	5.3%	33.3%
ちょっとした音を嫌がったり、触られるのを嫌がる	3.5%	50.0%
不安が強く、場慣れが悪い	14.0%	50.0%
人の気持ちが、わかりにくい	8.8%	100.0%

で90%以上の高い通過率を示していた。

発達問診票項目で「できる」が12項目中7項目以下であった子どもは計4人(7.0%)であった。そのうち、保育士が「とても気になる」3人、「少し気になる」1人、「気にならない」子はいなかった(表2)。

4.3 行動問診票について

20項目中「よくある」と回答のあった項目の割合は3.5%~22.8%と項目ごとに違いがあった。20%以上「よくある」とされた行動は「外からの刺激に気が散りやすい」「不器用である」であり、「落ち着きがない」は19.3%であり、他の項目と比較すると高い割合であった。この3項目は「よくある」と回答された子どもの中で「とても気になる」子が占める割合は41.7%~53.8%であり、他の項目と比較すると低い割合であった(表3)。

20項目中「よくある」と回答された子どもの中で、「とても気になる」子が占める割合を表3に示した。「とても気になる」子が7割以上を占めていたのは、「順番を待つことが難しい」「かんしゃくをおこしやすい」「ルールに従って遊ぶことが苦手」「友だちとうまく遊べない、一人遊びが多い」「こだわりが強い」の5項目であり、他の項目と比較すると高い割合であった。いずれの項目も「よくある」と答えた全体の割合は14%以下であり、他の項目と比較しても高い割合ではなかった(表3)。

行動問診票項目で「よくある」が20項目中5項目

以下であった子どもは11人(19.3%)であった。そのうち、保育士が「とても気になる」8人、「少し気になる」に2人、「様子をみたい」に1人、「気にならない」子はいなかった(表4)。

4.4 説明課題について

1~8問は70%~96%正答であり、9問51%、10問30%と低い正答率であった(表5)。

正答率の低い9、10問目は省き、1~8問の8問中5問以下の正答であった子どもは、保育士が「とても気になる」に5人、「少し気になる」に4人、「様子をみたい」に1人の計10名(17.5%)で「気にならない」子はいなかった。

4.5 音韻意識課題について

語頭音3試行中1試行以下の正答であった子どもは、9人(15.8%)であった。語中音3問中1問以下の正答は15人(26.3%)であった。語尾音3問中1問以下の正答は11人(19.3%)であった。語頭音と語尾音ともに3問中1問以下は7人(12.3%)であった。

語頭音3試行中1試行以下の正答であった子どもは、保育士が「とても気になる」5人、「少し気になる」2人、「様子をみたい」1人、「気にならない」1人の計9人(15.8%)であった。

4.6 片足支持課題について

片足支持課題について JMAP (日本版ミラー幼児発

表4 行動問診項目の「よくある」の数と保育士の「気になる」との関係

	「よくある」と回答した項目数	5項目以上	6項目以上	7項目以上
気になる	とても気になる	8人	6人	5人
	少し気になる	2人	2人	2人
	様子をみたい	1人	1人	1人
気にならない	気にならない	0人	0人	0人
計		11人 (19.3%)	9人 (15.8%)	8人 (14.0%)

表5 説明課題の正答率

		正答率
1	〇〇ちゃんのとしいくつですか?何歳ですか?	96.5%
2	家から保育園(幼稚園)にくるのに、どうやって来た?どうやって?	82.5%
3	コップのジュースをこぼしたら〇〇ちゃんはどうする?	86.0%
4	歯磨きするのどうして?	89.5%
5	手を洗うのはどうして?	73.7%
6	寝る前にトイレに行くのどうして?	84.2%
7	部屋が暑くなったらどうする?	96.5%
8	火事になったら〇〇ちゃんはどうする?	70.2%
9	スーパーで買い物したら、どうしてレジに行かなければいけないの?	50.9%
10	買い物をしようとして、お金を持っていなかったら、どうしたら良いと思う?	29.8%

達スクリーニング検査)では、4歳9か月～5歳2か月で課題の通過率の低位5%以下を2秒以下とし、低位6～25%を3～6秒としている。今回の対象児の年齢は4歳10か月～5歳10か月である。よって6秒以下を不通過とした場合、片足支持課題の両足ともに6秒以下は4人(7.0%)であった。

片足支持課題で両足ともに6秒以下の不通過であった4人全員「とても気になる」子であった。4人とも他の発達問診票項目、行動問診項目、説明課題、音韻意識課題いずれかの項目・課題で低い成績を示した。

4.7 行動制御課題について

行動制御課題で20秒の間、閉眼できないもしくは、体のどこかが動いている子を不通過とした場合、14人(24.6%)が該当した。14人の内訳は保育士が「とても気になる」4人、「少し気になる」5人、「様子をみたい」1人、「気にならない」4人であった。

行動制御課題で不通過だった子と行動問診項目で20項目中5項目以上「よくある」と回答され重複した子は、「とても気になる」4人、「少し気になる」2人、「様子をみたい」1人の計7人で「気にならない子」はいなかった。一方、行動制御課題のみ不通過だった子は「少し気になる」3人、「気にならない」4人の計7人であった。

4.8 各項目・課題の不通過基準案について

2項目・4課題実施した結果、正答人数または通過人数を参考に、今回は以下のように不通過基準案を提案する。

- ①発達問診票項目の不通過基準は「できる」と答えた7項目以下
- ②行動問診票項目の不通過基準は「よくある」と答えた5項目以上
- ③説明課題の不通過基準は8問中5問以下の正答
- ④音韻意識課題の不通過基準は語頭音3試行中1試行以下の正答
- ⑤片足支持課題の不通過基準は両足ともに6秒以下とする。
- ⑥行動制御課題の不通過基準は20秒以内に開眼するか、体の一部を動かすかのどちらか1つでもできなければ不通過とする。

4.9 不通過基準と5歳未満の子どもについて

不通過基準に該当した5歳未満は、発達問診票項目では0人、行動問診票項目では2人、説明課題では3人、音韻意識課題では2人、片足支持課題では2人、行動制御課題0人であった。

4.10 支援について

園で支援を行うために、前述した各問診票項目・課

題の不通過基準案を参考に、園内でフォローしていく子を決める基準案、および園内でフォローしながら他機関とも連携を行う子を決める基準案を考えた。

片足支持課題では、基準で不通過であった4人全員が、他の発達問診票項目、行動問診票項目、説明課題、音韻意識課題のいずれかの不通過基準案にあてはまり、片足支持課題の基準では新たな検出はなかった。行動制御課題の不通過基準では実施した幼児の約4分の1という多くを検出することになった。今回、片足支持課題と行動制御課題は、支援に結び付ける基準案には含めなかった。

4.10.1 園内でフォローしていく子について

園内でフォローしていく子とは、発達障害が疑われる子どもや経験不足な子どもを保育者同士が共通に認識し、1年間かけて生活の場である保育の中で、育て支援することを意味するとした。

発達の個人差の大きい年中児を対象としているため、園内でフォローしていく対象は1つの問診票項目・実施課題で不通過になった子と考えた。発達問診票、行動問診票、言語課題(説明課題および音韻意識)のいずれかで不通過があった場合、すなわち前述した各項目・課題の不通過基準案①・②・(③かつ④)のいずれか1つに該当する子どもは園内でフォローしていく対象と考えた。対象者は計8人(14%)が該当した。そのうち、保育士が「とても気になる」4人、「少し気になる」3人、「様子をみたい」1人、「気にならない」子は該当しなかった。

4.10.2 他機関と連携することが必要な子について

療育機関や地域の保健センターなど他機関と連携をしていく対象については、複数の項目の不通過基準から評価の基準を総合的に考えていく必要がある。よって前述した各項目・課題の不通過基準案(①かつ②)または(②かつ③かつ④)に該当する子どもは他機関と連携をしていく対象と考えた。他の機関と連携していく対象者として5人(8.8%)が該当した。5人とも保育士が「とても気になる」子であり、「気にならない」子は該当しなかった。

5. 考察

5.1 発達問診

今回実施した発達問診票項目の「ブランコがこげる」が約31.6%と低い通過率を示していた。この結果は問診票記入後に保育士に行ったアンケートから、園によってはブランコが無いために、ブランコがこげるかどうか分からないことが反映されたと考えられた。保育士に実施する項目としては適さないと考える。

小枝⁵⁾が報告した結果と比較すると、今回の結果

は発達問診票の通過率の低い項目が多かった。小枝の報告の結果は保護者が設問に答えたものであり、今回の調査では保育士は設問項目について保育活動の中で意識して観察し、「できる」のか不明な項目については、子どもに実際に実施して得た結果を答えていた。評価者の違いと意識して観察した結果で通過率の違いがあった可能性がある。

今回実施した園では「できる」が12項目中7項目以下であった子は7.0%であった。一方、小枝の報告の結果では2.2%であり、これは医療機関や療育機関の受診を強く勧めるレベルであるとしている⁵⁾。小枝の報告した項目とは項目内容を1項目変更しているが、項目数は同じであり、小枝の報告した通過率を参考にフォローしていく基準を考えたい。

5.2 行動問診

「外からの刺激に気が散りやすい」「不器用である」「落ち着きがない」の3項目について「よくある」と答えた子どもの割合は全体の19%以上で他項目より高い出現率であり、その中でも「とても気になる」子が占める割合は50%前後で他項目より低い出現率であった。この3項目は年中時期には多く見られる行動であることが示唆される。これらの項目が見られる場合は経過を追いながらフォローすることが必要だと考える。

一方「順番を待つことが難しい」「かんしゃくをおこしやすい」「ルールに従って遊ぶことが苦手」「友だちとうまく遊べない、一人遊びが多い」「こだわりが強い」の5項目に関しては「よくある」と答えた子どもの割合は全体の15%以下で他の項目と比べても高くない出現率であり、その中でも「とても気になる」子が7割以上の高い出現率であった。つまり年中時期には全体的に出現は多くない行動だが、保育士が「とても気になる」子には目立つ行動であることが示された。この5項目が「よくある」場合には注意して観察を継続しつつ適切な支援を考えていく必要が考えられる。これらの項目は、他項目よりも集団活動を乱す行動であり、そのため保育士が集団活動を運営していく上で困る行動であるとも考えられる。

行動問診票20項目中「よくある」が5項目以上であった子どもは、保育士が「とても気になる」子の総数10人中8人が含まれており、保育士の「とても気になる」子は行動面が気になる子に多い傾向が示された。

今回実施した園では、20項目中5項目以上が「よくある」とした子は、計11名(19.3%)であったが、5歳児健診の先進地域の福知山市では「よくある」15項目中2項目あれば他機関と連携することが必要だとし、広汎性発達障害に関係した3項目中「よくある」が1項目あれば他機関と連携することが必要だとされている。先進地域の指標を参考にフォローしていく基準

を考えたい。

5.3 説明課題

1～8問目までは平均85%の正答率であった。正答率の低い9問目、10問目は、年中児のスクリーニング課題には適さないと考える。1～8問目までの正答率で通過基準を考えることが適当であると考えられる。説明課題8問中正答が5問以下であった子どもは、57人中10人(17.5%)で、全員が保育士の「気になる」子であり、そのうち保育士が「とても気になる」子が5人含まれていた。保育士が「気になる」子と関わっていく時に、ことばでやりとりする経験が不足している幼児を日々支援し育てていくという視点が必要であることが示唆された。

5.4 音韻意識課題

原¹⁰⁾は、語頭音の抽出課題において、4歳後半で60%正答する子どもが7割いると述べている。今回の対象児の年齢は4歳10か月から5歳10か月で、全員4歳後半以上の年齢に達している。また語頭音3試行中1試行(約30%)の正答以下の子どもは9人(15.8%)で、そのうち8人は保育士が「気になる」子であったが、「気にならない」子が1人入っていた。音韻意識の発達は年中時期では気づかれにくい項目ではあるが、音韻意識の未熟な子どもは「気になる」子と重複する傾向があった。原の示した指標も参考にしながら、文字学習の準備性という観点からもフォローを行っていくことが大切である。

5.5 片足支持課題

片足支持課題については両足ともに6秒以下は4人(7.0%)であった。この4人は全員、保育士が「とても気になる」子としており、他の課題でも低い通過率・正答率で、本課題でのみ低い成績を示す子はいなかった。この課題の実施が必要であるか今後再検証したい。

5.6 行動制御課題

今回実施した行動制御課題では多くの幼児を検出する結果となった。行動制御課題を5歳児健診の項目として採用している小枝⁵⁾は、診察場面という環境が一律に統制された場面であるが、今回実施した園では環境を統制することが難しいため、環境によっても結果が影響を受けた可能性も考えられる。

行動制御課題で不通過だった子14人の中で、行動問診項目で20項目中「よくある」と回答された項目が5項目以上の子どもは7人であり、この7人は全員保育士が「気になる」子としていた。行動制御課題と行動問診票項目とを併行して見ていくことで、どちらの項目も不通過である場合には、日常の多くの場面で

行動が問題になることが考えられる。一方行動問診票項目のみ「よくある」項目が多く、行動制御課題は通過した場合には、注意集中を促せば短時間であれば行動をコントロールできる可能性が示唆される。

しかし、行動面は年齢が上がるにつれて落ち着いてくる子も多いため、成長途中であることを十分に念頭におきながら、関わるのが大切である。

5.7 各項目・課題の不通過基準案

片足支持課題の不通過基準案では、他の発達問診票項目、行動問診票項目、説明課題、音韻意識課題を実施して検出された子ども以外に新たに検出されることはなかった。不通過基準案を見直すためにも、人数を増やし検証する必要がある。

行動制御課題の不通過基準案では、約4分の1という多くの子どもが検出される結果となり、基準の見直しが必要だと考えられ、行動制御課題は行動問診票項目の不通過と併用してみていくなどの基準案を再検証したい。

不通過基準に該当した5歳未満の子が、各項目・課題で不通過人数に占める割合は0～30%以下と多くなかった。今回の不通過基準案が5歳未満の子をオーバースクリーニングする危険性は高くないと考えた。しかし対象人数を増やし検証する必要がある。

5.8 支援体制について

園内でフォローしていく子および他機関と連携することが必要な子の対象になったのは、保育士が「とても気になる」子10人中9人、「少し気になる」子17人中3人、「様子をみたい」子2人中1人であり、「気にならない」子は該当しなかった。結果的に保育士が「気になる」子を支援体制へ結びつけるような評価基準案であった。

発達の個人差の大きい年中児を対象としており、経験不足で能力が発揮できずに通過しなかったとも考えられるため、園内でフォローしていく対象児は、保育者同士が共通に認識し、個別支援計画を立てていくなどの積極的に意識的な関わりが必要になると考えた。保育の中で育て支援していき、必要に応じて他機関とも連携を行うことが大切である。

他の機関と連携する必要がある対象児は、保育者同士が共通に認識し、保育の中で支援することが大切である。さらに他の機関と連携を取りながら、支援を考えると、より円滑な就学移行支援にもつながると考えられた。

6. 結論と今後の課題について

保育士が「気になる」年中児が多く、保育士の「気になる」子はいずれの評価内容でもできる項目が少な

く、総じて低い成績を示した。

今回は就学までの1年間に園内で、実施可能なスクリーニング項目を検討し、言語・コミュニケーションの評価項目を加えることで、従来の5歳児健診よりも細かく問診票項目、実施課題を行えた。

スクリーニング項目の結果を就学移行支援へ反映させるために、支援体制へ結び付ける評価基準案を検討する際、成長途中であることを考慮に入れ、1つの問診票項目や実施課題の通過基準から支援が必要な対象をスクリーニングするのではなく、いくつかの評価項目結果を総合的に捉えていくことにした。そして発達障害が疑われる子どもや経験不足で能力が発揮できていない幼児を園の中で育て、必要に応じて他機関と連携するための基準案を出した。

今後は具体的な支援方法を、今回の問診票や課題の結果からわかった子どもの特性に応じて子どもの生活する園内で行う具体的な方法と他機関と連携するなどの支援体制の整備を含めて検討していく必要があり、評価基準の信頼性を高めるために対象人数を増やし、実施年齢も考慮して、就学後を含めた経過観察を行い、スクリーニング項目の検討を行う必要がある。

謝辞

本研究にご協力くださった保育士の先生方、保育園児に深謝いたします。なお、本研究は平成22年度県立広島大学重点研究事業の助成を受けて行ったものである。

文献

- 1) 小寺澤敬子：就学前軽度発達障害児への評価と支援について、LD研究, 35:293-297, 2007
- 2) 広島市：広島市発達障害者支援体制づくり推進プログラム。広島市発達障害者支援体制整備検討委員会（オンライン）、入手先< <http://www.city.hiroshima.lg.jp/www/contents/0000000000000/1237950797639/files/suisinprogram.pdf> >（参照 2011-3-1）
- 3) 本郷一夫、杉村僚子ほか：「気になる」子どもの保育支援に関する研究15—保育者間の認識差の変化について—、日本教育心理学会総会発表論文集, 49:216, 2007
- 4) 吉田れい：教材研究と保育計画。穴戸健夫、村山祐一 編、保育計画の展開 3.4.5 歳児の保育実践。東京、あゆみ出版、118-131, 1994
- 5) 小枝達也：軽度発達障害発見に対する5歳児健診の有用性の検討。厚生労働科学研究費補助金（子ども家庭総合研究事業）軽度発達障害児の発見と対応システムおよびそのマニュアル開発に関する研究。平成18年度 総括・分担研究報告書, 1-6, 2007

- 6) 小枝達也, 関あゆみほか: ちょっと気になる子どもたちへの理解と支援—5歳児健診の取り組み—. LD 研究, 35:265-272, 2007
- 7) 天野清: 語の音韻構造の分析行為の形成とかな文字の読みの学習. 教育心理学研究, 18(2):12-25, 1970
- 8) 三原市発達障害者支援検討委員会: 三原市発達障害者支援体制整備に向けての提言, 中間報告~乳幼児期から学齢期における支援体制整備~. 2009
- 9) 鳥取県: 平成 19 年度版鳥取県乳幼児健康診査マニュアル. 鳥取県福祉保健部健康対策課 (オンライン), 入手先 < <http://www.pref.tottori.lg.jp/secure/249478/ippan.pdf> > (参照 2011-3-1)
- 10) 弓削マリ子, 全有耳: 5歳児モデル健診に取り組んで—京都府中丹西保健所と福知山市の協働事業—. LD 研究, 35:273-281, 2007
- 11) 原恵子: 通常の学級・通級における音韻のアセスメント. LD 研究, 38:290-294, 2008

Developmental assessment of young children conducted at nursery school and kindergarten to support transition to primary school : The development of screening items for 5-year-old children

Mayumi HORIE Fumi TAMAI

Department of Communication Sciences and Disorders,
Faculty of Health and Welfare, Prefectural University of Hiroshima

Received 7 September 2011

Accepted 8 December 2011

Abstract

This study explored new developmental screening test items which can be used to identify 5-year-old children who require special support in the process of transition to primary school from nursery school and kindergarten. Nursery teachers examined 57 preschool children using 6 screening items, including explanatory and phonological awareness tasks in terms of language and communication development.

The assessment criteria for each task should be examined for children suspected of having developmental disabilities or inexperienced children. As for the children who did not pass the criteria, there were 7.0 % for the developmental checklist, 19.3 % for the behavior checklist, 17.5 % for the query-answering task, 15.8 % for the phonological awareness task, 7.0 % for standing on one leg, and 24.6 % in sitting down without moving. Child support guidelines should also be prepared to deal with children who need to be followed-up at preschool or those who need to be observed with the cooperation of other facilities.

Key words : The development of screening items for 5-year-old children , Terms of language and communication development , Children who require special support , Process of transition to primary school from nursery school and kindergarten, Child support guidelines